

◆本稿は2012年07月31日に「翻訳ミステリー大賞シンジケート」に掲載された“矢口誠の敵状偵察隊”の第3回「偵察任務#03: スティーヴ・ハミルトン『解錠師』」(<http://d.hatena.ne.jp/honyakumystery/20120731/1343688196>) の解答篇です。
(編集部) ◆

ということで、『×××』はなにかというと……英国のロック・バンド THE WHO が1969年に発表した2枚組のアルバム『トミー』である。この作品はアルバム全体に一貫したストーリーがある「史上初の本格的ロック・オペラ」として話題になり、欧米では大ヒットを記録、以降のポップ・カルチャーに大きな影響をあたえた。

ただし、ストーリーは少々難解。というか、歌詞がすべて掲載されているブックレットをしっかりと読みこんでも、なにがどうなっているのか曖昧な部分がある。ただし、この作品は英国の鬼オケン・ラッセル監督が豪華キャストで映画化しているほか、舞台ミュージカル版(日本公演も行なわれた)も制作されており、これによって物語の細部がより明確にされた。そのあたりの事情は、ウィキペディアの「トミー」の項に詳しいので、そちらを参照してほしい。

さて、この『トミー』の物語は、軍人であるトミーの父親が、第一次世界大戦で(生まれてくるはずの息子の顔を見ることなく)命を落とす場面からはじまる。トミーは母親と二人暮らしをしているが、やがて母親には新しい恋人ができる。ところが、ある日のこと、死んだはずの父親が突然帰還し、母親の恋人を殺してしまう。幼いトミーはその現場を目撃したショックで、目も見えず、耳も聞こえず、言葉もしゃべれない、三重苦の少年になってしまう。

と、ここまで書けば、わたしが『解錠師』のラスト(主人公のマイケルがなぜ言葉を失ったかが明かされる場面)で、「えっ、これって『トミー』とまったく同じ話じゃないか!」と叫んだ理由はおわかりだと思う。もちろん、『解錠師』の主人公マイケルは視覚や聴覚まで失うわけではない。しかし、「父親が母親の愛人を殺す現場を目撃した少年が、そのショックで言葉を失う」という設定は、基本的に『トミー』とそれとまったくおなじだ。しかもこの設定は、確かに「いかにもありがち」なものとはいえ、欧米では非常に有名な『トミー』のなかでも、とくに有名な部分なのである(ちなみに、トミーが三重苦を背負っているという設定は、作者のピート・タウンゼンドが信奉するインドの導師ミハー・ババが「悟りを開いて以来、生涯一度も言葉を話さなかった」という事実に触発されたものである)。

こうして『トミー』との類似点に気づいてみると、このふたつの作品には、さらに“類似点”があるのに気づく。以下に列挙すると……

① 主人公が「奇跡の少年」として新聞記事になり、有名になること。『トミー』には、三重苦からトミーが解放されたときに「奇跡の治療!」という号外が出るシーンがある。トミーはこれがきっかけで一躍有名になり、「新興宗教の教祖のような存在」にまつりあげられる。

② どちらの主人公も、さまざまな医者にかかったものの、「原因がわからない」と匙を投げられること。

③ どちらの主人公も、世間的には「品行方正」と思われている人物から虐待をうけること。『解錠師』のマイクルは、のちに恋人になるアメリカの父から、拷問に近い労働を強いられる。一方のトミーは、従兄のケヴィンや叔父のアーニーから虐待をうける。

④ 障碍を持ってからの主人公が、どちらも「天才的な技」を身につけること。トミーは三重苦にもかかわらず、ピンボールがとんでもなくうまくなり、「ピンボールの魔術師」の異名をとるにいたる。要するに、「指先の感覚だけを頼りに、ピンボール・マシンを自在に操れるようになる」のである。一方、『解錠師』のマイクルは、指先の感覚だけを頼りにどんな錠前もあけてしまう。彼は魔術師 (wizard) という異名こそとらないものの、友人から「魔法を見せてくれよ」と解錠を頼まれる。また、トミーが扱うのが「ピンボール」なのに対し、マイクルが扱うのは錠前の「ピン」である。

⑤ これはちょっと牽強付会だが……トミーがかかえているトラウマは「鏡」の記憶と結びついているのに対し、マイクルのトラウマは「水」の記憶に結びついている。トミーが三重苦から解放されるのは鏡を割る瞬間であり、マイクルがトラウマ克服への手がかりを得るのは「水に飛びこむ＝水面を割る」瞬間である。このふたつの視覚的イメージには非常に似通ったものがある……ように思うのだが、どうだろう。

と、これで「解答篇」はおしまいである。『解錠師』と『トミー』をどちらも「読んだ」人にはおわかりのように、ふたつの物語はぜんぜんべつのものだ。『解錠師』が『トミー』のパクリだというわけでは決してない。しかし、ハミルトンは『解錠師』を書くにあたって、明らかに『トミー』を下敷きをしたのではないか？ そう考えると、本書の原題が Lock Artist である理由が見えてくる。本書は、ハミルトンが『トミー』の作者であるピート・タウンゼンドという Rock Artist に捧げた作品なのである!!!……というのは、牽強付会を通り越して、妄想ですかね。ハハ。

※本原稿を書くにあたって参考にした資料は以下の通り。

Tommy 英国盤初版アナログLP 2セット、第2版1セット、第3版1セット。そのほか、ドイツ盤初版、ドイツ盤〈Phase Box〉版、フランス盤第2版、アメリカ盤初版、Simply Vinyl 重量盤、Classic Records 重量盤、各1セット。さらに、米国盤DVD-AUDIO版と、MFSL高音質盤CD、および各種CDが5種類ほど。「おんなじレコードばっかそんなに買ってどーすんだ」という声が聞こえてきそうだが、それはぜんぜん違う。これだけのレコードを買って作品研究に努めたからこそ、わたしは今回の『解錠師』評を書くことができたのだ。この膨大なレコードは、あくまでミステリ評論を書くための「資料」なのである。税務署のみなさん、そこんとこ、よろしく哀愁！